

境を経て、滿州山丹より海に入る薩哈連江の末に、此洲の北盡の近く指向へる故に、彼方より號て薩哈連といへるにて、本邦人は用べき名にあらず、

〔北蝦夷地部序〕北蝦夷地古稱ニカラフト島

此島は蝦夷島の極北ソウヤ地名の北十三里の海を隔て、北極地を出る事、凡四十六度より五十一度の間、に在りて、其地南北に長く、凡二百餘里東西に短し、凡七十八里にせまり狭き其周廻凡五百餘里、南は蝦夷島に對し、東は大洋をうけ、西北は東韃滿州の地方に臨める一大島なり、其人物蝦夷島の如き者は島の三分にして、その一に居し、其他は悉くヲロツコ、スメレンクルと稱せる異俗の夷是に居す、往時松前家島を撫するの時、明和年間家臣和田某なる者をして、此島の中東西僅に五十餘里の地理を觀せしめ、終にシラヌシ地名クシユンコタン地名の兩處に小府を設け、島夷を撫し、其産物を交易せしに、寛政十戊午年夏五月、信濃守松平忠明命を奉じて、夷島を檢するの時に當て、從夷高橋一貫中村意積なる者二人をして、此島東西の地理を窺しむといへども、其蹤僅に百里計にして歸り來りぬ、其地素より不毛にして、居夷亦多からず、徑路ありといへども、大低藜棘足を傷り、烟霧眼を鎖し、是に加ふるに、人居を絶つの間五十里百里にいたる者あり、故に其後奥地の地理を窺ふ者なかりしかば、或は孤島と稱し、又は滿州地域の岬と稱して、其説紛々たりしに、文化三寅年、夷島舉て官に上入し、松前に鎮臺を置て、島夷を教育せしめらる、同辰年、松田傳十郎、間宮林藏なる者をして、此島の奥地を窺しむといへ共、猶其極界をきわむるに及ばずして歸來りしに、同年秋再び間宮林藏一人をして、其奥地に至らしむ、所謂ヲロツコ、スメレンクルの地を経て、終に此島の北界を窮め、海を越へて東韃に入、其假府德楞哩名と稱る處に至り、清國の官吏に接して、島名を問ひ、其作事所業を閱して、冬十一月、松前府に歸り到るといふ、

〔蝦夷島記〕から戸島とて、蝦夷島の三分二程有之島御座候、から戸島へは蝦夷島より海上十里程